

新版『資本論』第1巻講座 第9講義

第5篇 絶対的および相対的剰余価値の生産

第6篇 労賃

主催：千葉県学習協

日時：2023年2月19日（日）午後1時00分～5時00分

ところ：千葉県自治体福祉センター4階会議室

講師：萩原伸次郎（横浜国立大学名誉教授）

第5篇 絶対的および相対的剰余価値の生産

第14章 絶対的および相対的剰余価値の生産

生産的労働とはなにか→労働過程を生産物の立場から考察すれば、・・・労働そのものは生産的労働として現れる（新版③885頁、新書版、871ページ、原文531ページ）

しかし、資本主義的生産過程から論じる場合、以上の規定では不十分であり、「資本家のために剰余価値を生産する、すなわち資本の自己増殖に役立つ労働者だけが、生産的である」「学校教師は、児童の頭脳を加工するだけでなく、〔学校を所有する〕企業家を富ませるための労働にみずから苦役する場合に、生産的労働者である」（新版③886～887頁、新書版、871～3ページ、原文、531～2ページ）

絶対的剰余価値の生産⇔相対的剰余価値の生産

「文化の初期においては、労働の既得の生産諸力を取るに足りないものであるが、……。他人の労働によって生活する社会部分の割合は、直接的生産者に比べるときわめて小さい」（新版③982頁、新書版、877ページ、原文、535ページ）

労働生産性と自然条件　資本主義的生産様式は、植物の繁茂している熱帯ではなく、むしろ温帯地域である。「自然的諸条件の恵みは、つねに、剰余労働の、したがって剰余価値または剰余生産物の、可能性を与えるに過ぎないのであって、その現実性を与えるのでは決してない。」（新版③896頁、新書版、881ページ、原文、537ページ）

剰余価値の源泉に関するブルジョア経済学者たちの無関心：彼らの階級的本能がそうさせた。ジョン・スチアート・ミルのナンセンスな議論：資本が利潤をもたらすのは、労働手段が、それらの生産に必要な時間よりも長時間持続するということである。販売も購買もなくとも利潤は存在する。労働者が彼らの賃金より20%多く生産すれば、利潤も20%である。賃金労働者は、賃金支払をまつ、すなわち資本を前貸しするから資本家だ。などなど。

第15章 労働力の価格と剰余価値との大きさの変動

研究するに当たっての条件

①商品は価値どおりに売られる②労働力の価格は、価値以下にはならない
とすると、労働力の価格と剰余価値の相対的な大きさは、次の三つの事情によって制約される。①労働日の長さ②労働の標準的強度③労働の生産力

第1節 労働日の大きさおよび労働の強度が不変で（与えられていて）労働の生産力が可変である場合

労働力の価値と剰余価値とは、3つの法則によって規定される。

第1法則：与えられた大きさの労働日は、たとえ労働の生産性が、またそれと共に生産物総量がどのように変動しようとも、つねに同じ価値生産物で表される。

第2法則：労働力の価値と剰余価値とは、お互いに反対の方向に変動する。しかし、反比例するわけではない。リカードの間違い。同じ大きさに増加したり減少したりするが、同じ比率ではない。

第3法則：剰余価値の増加または減少は、つねに労働力の価値それに照応する減少または増加の結果であって、決してその原因ではない。 $m = f(v)$

リカードの誤り：剰余価値をそれ自体として研究したことがないので、剰余価値率を利潤率と混同している。剰余価値率 $= m/v$ 利潤率 $= m/C$ $C = c + m$

第2節 労働日と労働の生産力とが不変で労働の強度が可変である場合

労働の強度が増大した場合：「生産物の数は増加するが、生産物の価格は低下しない」同一の労働日が、不変の価値生産物ではなく、可変の価値生産物で表されるということ。貨幣価値が変わらないとすれば、たとえば12時間労働日のそれが6シリングではなく、7シリング、8シリングなどで表されるから、労働力の価値と剰余価値も同時に増加する。

労働の強度は、国民経済レベルでは、時間が経つと新しい労働の強度が標準となるが、「ある国民の強度のより大きい労働日は、他の国民の強度のより小さい労働日より、より大きな貨幣表現で表わされる」（新版③913頁、新書版、898~9ページ、原文、548ページ）

第3節 労働の生産力と強度とが不変で労働日が可変である場合

① 労働日の短縮：剰余価値の縮小

② 労働日の延長：剰余価値の絶対的・相対的增加、労働力の価格も増加する可能性あり。

労働力の価格が名目的に変わらないとしても、労働力の価値以下に低下することがある。

第4節 労働の持続、生産力、および強度が同時に変動する場合

いろいろな組み合わせが可能だが、2つの重要な場合をとりあげる。

① 労働の生産力が減少し、同時に労働日が延長される場合

労働力の価値が上昇するので労働日が変わらないと剰余価値は減少する。したがって、労働日を延長して剰余価値の維持を図る。1799年から1815年までのイギリス、穀物価格の急騰→生活手段の上昇→賃金上昇、穀物法撤廃運動の要因となる。

③ 労働の強度と生産力が増加し、同時に労働日が短縮される場合

「資本主義的生産形態が廃止されれば」→労働日を必要労働に限定することが可能。必要労働は、範囲を拡大する。労働者の生活条件・生活要求が大きくなるから。また剰余労働の一部は、社会的な予備元本および蓄積元本に必要な労働に算入される。(新版③920頁、原文552頁)

「労働の強度と生産力が与えられているとすれば、そして労働が社会の労働能力あるすべての成員のあいだに均等に配分されていなければならないほど、また、ある社会層が労働の自然的必要性を自分自身から他の社会層に転嫁できなくなればなるほど、社会的労働日のうちで物質的生産のために必要な部分がそれだけ短くなり、したがって、諸個人の自由な精神的および社会的な活動のために獲得される時間部分がそれだけ大きくなる。」(新版③920頁、原文552頁)。

マルクスの未来社会論における労働時間短縮の意義についての『資本論』での最初の叙述である。

第16章 剰余価値率を表わす種々の定式

$$\text{I} \quad \text{剰余価値} / \text{可変資本 (m/v)} = \text{剰余価値} / \text{労働力の価値} = \text{剰余労働} / \text{必要労働}$$

古典派経済学による定式化

$$\text{II} \quad \text{剰余労働} / \text{労働日} = \text{剰余価値} / \text{生産物価値} = \text{剰余生産物} / \text{総生産物}$$

古典派の式は、労働の現実の搾取度を正確に把握していない。「価値生産物が、資本家と労働者のあいだに分割される比率を表現している」(新版③923頁、新書版、908ページ、原文、554ページ)

今風の言葉で言えば、資本分配率であり、必要労働を分子におけば、労働分配率ということになる。

マルクスの定式をさらに敷衍すれば、

$$\text{III} \quad \text{剰余価値} / \text{労働力の価値} = \text{剰余労働} / \text{必要労働} = \text{不払労働} / \text{支払労働}$$

第6篇 労賃

第17章 労働力の価値または価格の労賃への転化

労働者の賃金は、労働の価格、一定の分量の労働に対して支払われる一定分量の貨幣として現れる。しかし、12時間労働日の価値をそれに含まれる12時間労働によって規定するというのは同義反復

ところで、仮にこうしたばかげたことをおくとしても、12時間の労働日がたとえば6シリングの貨幣価値で表わされたとして、賃金が労働の価値ならば、6シリングとなり、剰余価値は発生しない。

労働者が労働力を所有し、労働力を売る。現実には労働が始まるともはやそれは彼のものではない。労働は価値の実体であり、労働そのものは価値をもたない。労働の価値というのは、土地の価値というのと同じひとつの想像上の表現である。(新版③930～933頁、新書版、917～9ページ、原文、558～559ページ)

古典派経済学は無批判に「労働の価格」というカテゴリーを借用し、そのあとでこの価格がどのように規定されるかを考えた。需要供給から労働の「必要価格」(重農主義者)「自然価格」(アダム・スミス)

古典派経済学が労働の価格と名づけたのは、実は、労働力の価値であり、労働力は、労働者の人身のうちに実存する。労働力の機能が労働であり、機械が機械の作動とはべつのものであるのと同じこと。(新版③935頁、新書版、920～21ページ、原文、561ページ)

現実的關係：
労働力の日価値 剰余労働
a ——— 6時間 ——— b ——— 6時間 ——— c
3シリング 3シリング

現象形態：
 労賃
 労働の価値
a ——— 12時間 ——— b
3シリング

(新版③936～937頁、新書版、922～3ページ、原文、561～2ページ)

「現実的關係を見えなくさせ、まさにその関係の逆を示すこの現象形態は、労働者および資本家のもつあらゆる法律観念、資本主義的生産様式のあらゆる神秘化、この生産様式のあらゆる自由の幻想、俗流経済学のあらゆる弁護論的たわごとの、基礎である」(新版③938～939頁、新書版、924ページ、原文、562ページ)

この現象形態は、なぜ生じるのか。

①資本と労働とのあいだの交換は、さしあたり他の商品売買と同じ関係とみなされる。

②賃金は働いた後の支払となる。

④ 労働者が資本家に提供するのは、具体的労働である。

⑤ 資本家は自分の利潤は、いつも価値以上に売ることから生じると思っているから、労働に支払っても利潤は生み出せると考える。

⑥ 労働日の長さによって賃金は変動する

⑦ 賃金の個人的違い。

「現象形態は、直接に自然発生的、普通の思考形態として再生産される、がその隠れた背景は、科学によって始めて発見されなければならない」（新版③942 頁、新書版、928 ページ、原文、564 ページ）

第 18 章 時間賃金

「労働の平均価格は、労働力の日価値を平均的労働日の時間数で除することによって得られる」（新版③944 頁、新書版、930 ページ、原文、566 ページ）

1 労働時間の価格＝労働力の日価値／平均的労働日の時間数＝3 シリング／12 労働時間＝3

ペンス／時間＝労働の価格の尺度単位

賃金＝労働の価格（1 労働時間の価格）×労働時間

36 ペンス（3 シリング）＝3 ペンス×12 時間

18 ペンス（1 シリング半）＝3 ペンス×6 時間

24 ペンス（2 シリング）＝3 ペンス×8 時間

資本家は、「労働の標準価格」（3 ペンス）支払うという口実のもとに自分の好きなだけ、恣意的に短くしたり、長くしたりすることができる。

標準労働時間を超える場合、労働力の価値は、労働力がより消耗するので増大する。したがって、標準労働時間を越えると、小さい額ではあるが、割増金が支払われる。（新版③949 頁、新書版、935 ページ、原文、569 ページ）

「一産業部門で労働日が長ければ長いほど、労賃はそれだけ低い」（新版③951 頁、新書版、937 ページ、原文、569 ページ）

低い労働の価格⇔長時間労働

「この異常な、すなわち社会的平均水準を超え出る不払い労働分量を自由にする力が、やがて資本家たち自身の間の競争手段になる」①不払い部分は価格に計算しない。②異

常な剰余価値の一部を販売価格から除外する。(新版③953 頁、新書版 939 頁、原文、571 ページ)

ロンドンの製パン業者

「資本家は、労働の標準価格でも一定分量の不払い労働を含んでおり、この不払い労働こそが彼の利得の標準的な源泉であることを知らない」(新版③955 頁、新書版、941 ページ、原文、572 ページ)

第19章 出来高賃金

「出来高賃金は時間賃金の転化形態以外のなにものでもない」「労働の価格は、……生産者の作業能力によって規定されるかのように見える」(新版③957 頁、新書版、943 ページ、原文、574 ページ)

現実的關係：

労働力の日価値	剰余労働
12 個	12 個
a _____ 6 時間 _____ b _____ 6 時間 _____ c	
3 シリング	3 シリング

現象形態：

労賃
労働の価値
24 個
a _____ 12 時間 _____ b
3 シリング

1 個あたりの賃金＝労働力の日価値／1 労働日における生産個数＝3 シリング／24 個＝1.5 ペンス／個＝労働の価格の尺度単位

賃金＝労働の価格（1 個あたりの賃金）×生産個数

36 ペンス（3 シリング）＝1.5 ペンス×24 個

18 ペンス（1.5 シリング）＝1.5 ペンス×12 個

出来高賃金の特徴的な独自性

- ①製品の品質が要求されるから、完全に支払われるには平均的品質が必要
- ②労働の強度を測るたしかな尺度
- ③労務管理の不要→近代的家内労働・苦汗制度
- ④労働強度の標準度を高めるのを容易にする
- ⑤労働者の個人的な相違によって変動するが、変動は平均化される

↓

「出来高賃金は、資本主義的生産にもっとも適応した労賃形態である」(新版③966～967 頁、新書版、952～3 ページ、原文、580 ページ)

労働の生産性が変動するにつれ出来高賃金も変動する

前の例において生産性が倍になった場合

労賃

労働の価値

48 個

a _____ 12 時間 _____ b

3 シリング

1 個あたりの賃金＝労働力の日価値／1 労働日における生産個数＝3 シリング／48 個＝
0.75 ペンス／個＝労働の価格の新尺度単位

賃金＝労働の価格（1 個あたりの賃金）×生産個数

36 ペンス（3 シリング）＝0.75 ペンス×48 個

18 ペンス（1.5 シリング）＝0.75×24 個

第 20 章 労賃の国民的相違

「国民的諸労賃の比較にあたっては、労働力の価値の大きさの変動を規定するすべての契機が考慮されなければならない。（新版③972 頁、原文 583 頁）」第 1 次的生活必需品の価格と範囲、労働者の教育費、婦人労働・児童労働の役割、労働の生産性、労働時間、労働強度

表面的比較においても、異なる諸国の同じ職業の平均費賃金→最終的には出来高賃金に置き換える必要

国際価値について

「個々の国々を構成部分とする世界市場においては・・・・・・、中位の労働強度は、国々によって変動する。・・・・これらの国民的諸平均は段階状をなし、その度量単位は世界的労働の平均単位である。したがって、強度の高い国民的労働は、強度の低いそれに比べ、同じ時間内に、より多くの貨幣で表現されるより多くの価値を生産する」（新版③973 頁、原文 584 頁）

「世界市場では、より生産的な国民的労働、このより生産的な国民が競争によってその商品の販売価格をその価値まで引き下げることを余儀なくされないかぎり、より強度のより大きい国民的労働として計算される」（新版③973 頁、原文 584 頁）

<労働の強度・生産性が国際的水準の国：A><労働の強度が A 国の 2 倍の国：B>

<労働の生産性が A 国の 2 倍の国：C><労働の強度・生産性とも A 国の 2 倍の国：D>

A 国が 1 時間の労働で製品 1 個つくるのに 3 ペンスかかるとすれば、B 国では労働の強度が A 国の 2 倍だから、1 時間で製品が 2 個でき、1 個 3 ペンスかかるから 2 個で 6

ペンスとなり、C 国では、労働生産性が A 国の 2 倍だから、1 時間で製品が 2 個でき、本来なら 1 個 1.5 ペンスとなるとところが、生産性の高さはより強度の高い労働として換算されるので、たとえば、まったく販売価格を下げる必要がなければ、2 個で 6 ペンスとなり、さらに D 国では、労働の強度が A 国の 2 倍なので 1 時間で 2 個、さらに労働の生産性が A 国の 2 倍だから 1 時間で都合 4 個生産されることになり、これも販売価格を下げる必要がまったくなかったとすれば、1 個 3 ペンスだから 12 ペンスの価値生産をおこなうことになる。「したがって、異なる国々で同じ労働時間内に生産される同種の商品の異なる分量は、不等な国際価値を持ち、これらの価値は異なる価格で、すなわち国際価値に応じてそれぞれ異なる貨幣額で表現される」（新版③974 頁、原文 584 頁）すなわち、上の例の場合、A 国：1 個 3 ペンス、B 国：2 個 6 ペンス、C 国：2 個 6 ペンス、D 国 4 個 12 ペンスというわけである。

資本主義的生産様式が発展している国は、労働生産性・強度とも高いから、たとえば、低い国が、20 エレのリンネル＝2 オンスの金、だとすれば、40 エレのリンネル＝2 オンスの金のようになる。貨幣の相対価値とは、貨幣量をそれで表現される商品量によって割った数値だから、

$$2 \text{ オンスの金} / 20 \text{ エレのリンネル} > 2 \text{ オンスの金} / 40 \text{ エレのリンネル}$$

の不等式が、表現していることは、商品の労働生産性の高い国の貨幣の相対価値は、低い国のそれに対して小さいということである。「したがって貨幣の相対価値は、資本主義的生産様式のより発展した国民のもとでは、発展の低い国民のもとでよりも小さい」（新版③974 頁、原文 584 頁）ということになる。「したがって、名目的労賃、すなわち貨幣で表現された労働力の等価物も、やはり第 1 の国民のもとでは、第 2 の国民のもとでよりも高い」（新版③974 頁、原文 584 頁）となる。つまり、資本主義の発展した国のほうが、そうでない国に比べて、同じ貨幣量で表示される商品量が多いからである。もちろんこのことは、資本主義の発展している国の賃金財の価格が安い場合に限られるのであって、必ずしもそうではないので、「現実の労賃、すなわち労働者の自由な処分に委ねられる生活手段についても同じように言えるということには決してならない」（新版③974 頁、原文 584 頁）というわけである。

賃金水準は、第 1 の国民のもとでは第 2 の国民のもとでよりも高いが、相対的剰余価値は、第 1 の国のほうが高いから、「剰余価値や生産物価値との割合から見た労働価格は、第 2 の国民のもとでは第 1 の国民のもとでよりも高い」（新版③974 頁、原文 584 頁）となるのである。

同じことをユアは、次のように言うのである。「賃金は、イギリスでは、大陸でよりも労働者にとっては高いかもしれないが、工場主にとっては実質上は低い」（新版③975 頁、原文 585 頁）。